

西尾正道さん

(北海道がんセンター名誉院長)

なぜ国民の健康を損ねようとするのか

化学物質や農薬、遺伝子組み換え食品に放射性物質——今や日本は「多重複合汚染列島」と化し、深刻な健康被害、環境要因による「生活環境病」に襲われ始めている。国の無策、問題意識のなさ、データのインチキ、隠蔽に西尾さんは怒りの拳を上げ続けている。

多重複合汚染の実態

——「近年の病気は生活環境病である」と強く警鐘を鳴らされていますが、どのような問題があるのでしょうか。

私は約四十年間、放射線治療医として、がんをいかに治すか追い求めてきましたが、福島原発事故後、放射線の健康被害についてあらためて考える機会が多くありました。さらに農薬や殺虫剤、除草剤の化学物質、遺伝子組み換え食品について調べていくと、これらも

鼻を垂らしている子どもがずいぶんいたものですが、いまはほとんどいません。衛生的な生活が上顎がんの罹患を激減させたのです。

一方、ホルモンに関係する病気は増加の一途をたどっています。アメリカ産の牛肉は、生産性を高めるた



●にしお・まさみち 1947年函館市生まれ。札幌医科大学卒業。北海道がんセンター(旧国立札幌病院)に39年間勤務し、がんの放射線治療に従事。約3万人の患者に接し日本のがん医療の問題点を指摘し、改善するための医療を推進。「市民のためのがん治療の会」、NPO法人いわき放射能市民測定室「たらちね」、「関東子ども健康調査支援基金」各顧問。著書に『正直ながんのはなし』『患者よ、がんと賢く闘え! 放射線の光と闇』『被ばく列島』など。

大きな問題であることが分かってきました。

私が医者になったときのがん罹患者数は年間二十万人でしたが、いまは一〇〇万人を超えています。これは単に高齢社会になったからという理由では説明がつかえません。かつて、がんが死因のトップとなっていたのは六十歳からの高齢者でしたが、最近は四十歳代以降の死因のトップががんとなっていて、二十年も若年化しています。

上顎がんは慢性感染症が要因ですが、四十年前は年間三十例ほどの治療をしていました。しかし最近はその間に一例あるか、ないかです。昔は蓄膿症で、青つ

め女性ホルモン入りの餌で飼育されています。その牛肉の日本の消費量は四十年間で五倍となっています。男性の前立腺がん、女性の乳がん、子宮体がん、卵巣がんなどはホルモン依存性のがんですが、やはり五倍になっている。子宮がんの内訳も、頸がんと体がんの比率はかつて九対一でしたが、現在は四対六です。病気のものが、食の生活習慣や環境によって変わってきているわけです。

さらに、子どもの発達障害も急増しています。最大の原因として、現在最も普及しているネオニコチノイド系農薬が絡んでいることが解明され、発がんや認知症、うつ病との関係も指摘されています。

一九八〇〜九〇年代に野村大成さん(大阪大学名誉教授、放射線基礎医学)による優れた研究報告があります。マウスを使った研究で、親が放射線に曝露されると、突然変異だけでなく、がんや先天障害までもが子孫に引き継がれ、その生殖細胞の変異は次世代に遺伝することが報告されました。また低線量の放射線と低用量の毒性化学物質に汚染されると、一方だけではがんが発生しなくても、両者に汚染されると相乗効果でがんが発生しやすくなることも報告されています。